

ホッピー教

山根悠謳

仕事柄、午前中は自宅にすることが多い。たいてい二階の書斎で読書をして寛いでいる。ときどき玄関のドアフォンが鳴る。しかたなく玄関先へ出てみると、おおかた宗教か新聞の勧誘である。私は宗教を信じようとは思わないし、読みたい新聞も決まっている。少しでも先方の話を聴くとえんえんと説明が続く。そこで機先を制して、「結構です」と言うことにしている。

あるときドアフォンが鳴ったので、玄関のドアを開けた。すると宗教を勧誘する目的で、二人のご婦人方が立っていた。

「今日は、私たちの宗教の雑誌を読んでもらいたくて伺いました」

「ご主人様、何か宗教へ入っておられますか」

いつものように「結構です」と言って、早々に断ってしまおうかと思っただが、とっさに「ホッピー教です」と答えてしまった。すると相手のご婦人方は、「そうですか」と一言いって、すぐに立ち去ってしまった。どうやら新興宗教とでも思ったようである。思わず笑いが込み上げてきた。

「ホッピー」という言葉の響きから、「ハッピー」が連想される。政治の世界には幸福なんとか党のような政党もあるわけだから、「ホッピー教」があつても不思議ではない。実は「ホッピー」とは、関西ではあまりなじみはないが、ある麦酒風炭酸飲料の名前である。焼酎をこのホッピーで割って飲むと爽快な気分になり、一気に疲れが吹っ飛び、「ハッピー」な気分になれる。

私が初めてホッピーと出会うきっかけとなったのは、昭和五十三年（1978）のことである。この年の四月に東京都公立中学校の新任教師として、町田市の学校に赴任した。学生時代を過ごした京都から引越し、初めての東京生活。下宿先は小田急線町田駅の一つ手前の駅、玉川学園の近くにあり、最初の頃は電車を利用して学校まで通っていた。

就職して一ヶ月くらい経ったある日、仕事を終えて駅に向かっていると、後ろの方から、「山ちゃん」と私を呼ぶ声が聞こえてきた。振り向くと、教頭先生が近づいてきていた。「山ちゃん、ちよっと飲みに行こうか」と誘われた。即座に「はい」と返事をした。もちろん上司からの誘いということもあるが、むしろ慣れない東京生活でホームシックになり

かけていた私には、誘ってもらえたことが何よりうれしかった。

連れていかれたのは、小田急線町田駅のすぐ傍にあった馬肉専門の居酒屋、「柿島屋」(現在は駅から少し離れたところに移転している)である。教頭先生は、さっそく肉鍋(馬肉と野菜の鍋物)と肉皿(馬肉の煮込み)、それに馬刺しを注文した。まさに馬づくしだ。そして、飲み物としてホッピーをたのんだ。「山ちゃん、どうする」と聞かれたので、「同じものでいいです」と答えた。私にとっては、ホッピーも馬肉料理も生まれて初めて口にするものだった。

最初に運ばれてきたのは、馬刺しとホッピーだった。生の獣肉を食べるのには少し抵抗があったので、ためらっていた。教頭先生が、「食べてみたら、うまいよ」と言うので、意を体して食べてみた。思ったほど味に癖がなく、美味だ。ホッピーも一口飲んでみた。ビール風味の炭酸飲料だが、ビールのようにお腹に溜まる感じがなく、すっきりとした喉越しもいい。私はすぐにホッピーも馬肉料理も気に入ってしまった。

料理に慣れてきたところで私の緊張もほぐれ、教頭先生との会話も弾むようになってきた。最初は世間話や趣味の話が中心であったが、徐々に教育に関することにも及んできた。「山ちゃん、おちこぼれの生徒を見捨てないようにね」と教頭先生はとつぜん私に話しかけ、さらに続けた。

「大学るとき、私はおちこぼれでねえ。同じクラスの学生はみんな優秀なのに私だけが出来が悪いので劣等感で悩んだよ。将来に希望が持たなくて、何度大学を止めようと思ったか」

「私も現役、浪人と二度も第一志望の大学に落ち、絶望した時期がありますよ」と相槌を打った。

「学生時代に家庭教師をしていて、中学生の子に数学を教えていたんだよ。それほど勉強が好きなお子ではなかったんだけど、問題が解けるとうれしそうなお顔をするんだなあ。私もうれしくなってね。こんな私でも誰かのためになれるんだ、とこのとき思ったね」

「このことがきっかけで、中学校の教師になろうと思ったんだ。大学での成績は相変わらずで、かろうじて大学は卒業できたがね」

この後も教頭先生は気軽に自分の教育体験を私に語ってくれた。「たぶん私が新任の教師だったので、話しやすかったんだろうな」と思った。私にとってこのときの経験は貴重なもので、その後の教師生活でも、三十五年後の現在でも、私の心の中にしっかりと根づいている。

教頭先生は翌年市内の別の中学校に転勤となり、さらに数年後、別の中学校の校長先生となった。私も三年後、八王子市の学校に転勤となり、教頭先生とは酒場でご一緒することはなくなった。

柿島屋へはその後も同僚の先生方とよく飲みに行ったり、一人でも帰りに立ち寄るようになった。ホッピーも馬肉料理も、そのうち私の大好物となっていた。他市の学校へ転勤となった後も、休日に時々一人で訪れていた。肉鍋を肴にホッピーを飲んでみると、日頃の悩みや仕事の疲れも吹き飛び、リフレッシュできる。私はホッピーでハッピーな気分になり、馬肉料理で馬力をつけていたようなものだ。その意味で柿島屋は私のパワースポットであり、「ホッピー教」の聖地でもあった。

東京では庶民的な居酒屋は、たいていホッピーを置いているので、転勤してからも部活の指導を終えて帰る途中に立ち寄って、ホッピーを飲んでいくことが多くなった。また、休日を利用して東京の下町を見学に行ったときには、地元の居酒屋に立ち寄り、煮込みや焼鳥を肴にホッピーを飲んでいく。ホッピーは、私の東京生活には欠かせないものになっていた。

ある日、北千住の居酒屋に行ったとき、カウンター席でアメリカ人の男性と隣り合わせになった。日本に来て五年になるそうで、日本語もかなり上達していて、たいていの日本語は理解でき、片言の日本語で会話もできるようになっていた。彼もホッピーが大好きだったので私と話が合い、しばらく話が弾んだ。急に彼が英語で「アー ユー ハッピー？」と言ってきたので、「イエス アイム ホッピー」と答えた。二人は一瞬お互いに顔を見合せ、しばらくして大笑いした。ホッピーを飲むとハッピーになれる。「ホッピーとはなんてすばらしいネーミングなんだろう」と思った。

私は、ホッピーという商品名はハッピーを振ってつけたものだと思っていた。少し事情が異なることを最近知った。平成二十一年（2009）のことである。『ルビコンの決断』というテレビ番組で、実の娘である現社長が父親から社長を引き継ぎ、幾多の挫折を経験しながらホッピーの売り上げを伸ばし、会社を成長させていくまでをドラマ化していた。そのなかでホッピーの名前の由来が紹介されていた。「本物のホップを使ったノンビール」ということで、最初の案は「ホッピー」だったが、発音しづらいので「ホッピー」になったということだ。事情はどうかあれ、私はホッピーを飲むとハッピーになれる。

平成十七年（2005）四月、私は二十七年間務めた教師を辞め、京都で大学聴講生として日本史の勉強をするために、滋賀県草津市に転居した。転居したばかりの頃は、地元

の滋賀県はもちろんのこと、関西の居酒屋にはポッピーを置いている店はほとんどなかった。悶々とした日々を送っていた。必死で探索した結果、なんとか京都市内に一軒だけポッピーを置いている店を探し当て、再会を果たすことができた。しばらくして、自宅近くの酒類量販店でもポッピーとポッピーとの相性がいいキンミヤ焼酎が売られているを見つけた。

現在では定期的に購入して自宅でも嗜んでいる。また、JR高槻駅の近くにある串カツ屋でもポッピーが飲めるので、気分転換に時々足を運ぶ。東京より関西に転居して、早八年。ようやく関西での「ポッピーを飲んでハッピー」な生活が板についてきた。どうやら、本当にポッピー教の信者になったようである。